

フランス語の教科書に見られる複合過去形と半過去形

—アスペクトの観点から—

Analyse des temps verbaux passés dans les manuels de français

小 澤 南 海

Minami OZAWA

1. はじめに

日本人フランス語学習者にとって、複合過去形と半過去形を使い分けることは難しいと言われている。それらの使い分けについて述べられた研究は多数存在し、アスペクトの観点から分析された研究も少なくない。先行研究を概観すると、文法アスペクトと語彙アスペクトを一致させて使用する傾向にあることが示されている (Labeau 2002, 松澤 2014, Ozawa 2019)。つまり、複合過去形という時制自体が持つ完了アスペクトとその動詞句が持つ語彙アスペクトが完了の場合、そして半過去形が持つ非完了アスペクトとその動詞句の語彙アスペクトが非完了である場合である。ただし、日本人学習者の自由会話を分析した Matsuzawa & Kawaguchi (2020: 73) は、中級以上の学習者はこの傾向に必ずしも当てはまらないことを指摘している。

外国語学習においては、語彙学習とその語彙に出会う頻度に相関関係があることが分かっている (Zahar, Cobb, and Spada, 2001: 556)。特に学習者のレベルが低いほどその相関が高いため、学習初期の段階において多く出会う語彙は習得されやすいと考えられる。以上を踏まえて本論文では、外国語学習に必須である教科書をデータとして使用し、A1レベルのフランス語の教科書に出現する複合過去形と半過去形について、頻度調査を出発点とし、アスペクトの観点から分析を行う。さらに日本で出版された教科書とフランスで出版された教科書間で比較をすることでそれぞれの特徴を理解し、フランス語教育への提案を行う。

2. 文法アスペクトと語彙アスペクト

本論文では、フランス語の数ある過去時制の中でも、特に日本人学習者にとって使い分けが困難であると言われている複合過去形と半過去形のみ取り上げる。教科書においては一般的に、複合過去形は過去の出来事や完了した行為を表すとされ、半過去形は過去における継続中の行為や状態・習慣を表すと説明される。

時制が持つアスペクトは文法アスペクトと呼ばれ、語彙が持つ語彙アスペクトと区別されている。Comrie (1976: 3) によると、文法アスペクトはある状況の内部構成の様々な見方を指す。複合過去形はある一定期間内で完了した事行を示す完了アスペクト (un aspect perfectif (non sécant)) を持ち、半過去形は終点が無く、永続的に進行する事行を示す非完了アスペクト (un aspect imperfectif (sécant))¹を持つ

¹ 半過去形の文法アスペクトは未完了アスペクトであると示されることもあるが、複合過去形の持つ完了アスペクトとの対立を事行の完了の有無によって明確にするため、本論文では非完了アスペクトと示す。

(Guilbert et al., 1971: 269)。

一方語彙アスペクトとは、以下で Dowty (1979: 52) が示す、動詞句が内在的に持つ固有のアスペクトのことを指す。

(...) *aspect* markers serve to distinguish such things as whether the beginning, middle or end of an event is being referred to, whether the event is a single one or a repeated one, and whether the event is completed or possibly left incomplete.

(アスペクトマーカーは、ある出来事の開始点、中間点、終点のどれを示しているのか、出来事は一度しか起こらないことなのか、繰り返し起こることなのか、そして出来事は完了しているのか、未完了である可能性を残したままなのか等の点を区別するのに役立つ。(筆者訳))

Vendler (1967) は、語彙アスペクトを状態・活動・達成・瞬間の四種類に分類している。フランス語については、Bergström (1995) が Vendler (1967) に基づいた四分類を提示している。

表1 Bergström (1995: 58) による共起テスト²

	État (状態)	Activité (活動)	Accomplissement (達成)	Achèvement (瞬間)
être en train de (～している最中)	*	ok	ok	*/△
en X minutes (X分で)	*	*	ok	*/△

* = agrammatical (非文) ; ok = grammatical (文法上正しい) ; △ = effet ralenti/culmination/sérialisation (スロー効果、終点効果、連続効果)

分類には être en train de と en X minutes の共起テストが使用されている。状態アスペクトを持つ動詞句は、être en train de と en X minutes と共起ができない。

(1) * Charlot est en train d'être dans la camionnette de police.

* シャルロは警察車両にいる最中だ。

(2) * Charlot est dans la camionnette de police en cinq minutes.

* シャルロは5分で警察車両にいる。

(Bergström, 1995: 57)

活動アスペクトを持つ動詞句は、être en train de とは共起可能であるが、en X minutes とは共起ができない。

(3) Charlot est en train de rêver de la belle vie.

シャルロは素晴らしい人生を夢見ている最中だ。

(4) * Charlot rêve de la belle vie en cinq minutes.

* シャルロは5分で素晴らしい人生を夢見る。

(ibid. 57)

² 表中及び共起テストの例文の日本語訳、並びに例文の下線は筆者によるものである。なお共起テストの説明は小澤(2019)を参照。

達成アスペクトを持つ動詞句は、終点はあるけれども瞬間的ではなく継続的で、être en train de と en X minutes とともに共起が可能という特徴を持つ。

(5) Charlot est en train de manger beaucoup.

シャルロはたくさん食べている最中だ。

(6) Charlot mange beaucoup en cinq minutes.

シャルロは5分でたくさん食べる。

(ibid. 57)

共起テストにおいて最も複雑な瞬間アスペクトを持つ動詞句については、être en train de と en X minutes のどちらにも共起できないものもある。ただし、スロー効果、終点効果、連続効果といった特別な効果が生じるときのみ共起可能である。例えば apercevoir (気づく) を使った文では、どちらの句とも共起ができない。

(7) * Charlie est en train d'apercevoir la jeune femme.

* シャルリは若い女性に気付いている最中だ。

(8) * Charlie aperçoit la jeune femme en cinq minutes.

* シャルリは5分で若い女性に気付く。

(ibid. 58)

しかしながらスロー効果が生じると、以下の通り être en train de と en X minute のどちらとも共起が可能である。スロー効果が生じる文では、être en train de と共起した際、その行為が完了するまでの過程に焦点が当たり、あたかもゆっくりと事態が進展しているような印象をもたらす。また、en X minutes と共起すると、X分以内にその出来事が起きるという意味ではなく、X分経った後に生じるという意味を持つようになる。

(9) La bombe est en train d'éclater.

爆弾が破裂している最中だ。

(10) La bombe éclate en cinq minutes.

爆弾が5分で破裂する。

(ibid. 58)

動詞句によっては être en train de と en X minutes が終点効果をもつこともあり、その場合どちらの句とも共起が可能である。このとき、être en train de と共起すると、その出来事の終点が考慮されず、それに繋がる過程のみが表される。en X minutes もスロー効果と同様に、X分経つまで終点は考慮されないことから、スロー効果と終点効果の類似性は否定できない。

(11) Le cheval est en train de gagner la course.

馬がレースに勝利している最中だ。(=勝利目前だ)

(12) Le cheval gagne la course en cinq minutes.

馬が5分でレースに勝利する。

(ibid. 58)

連続効果においても、être en train de と en X minutes のどちらとも共起が可能である。être en train de と共起すると、同じ内容の別々の出来事が連続して起こっていることのように表される。en X minutes に関しては、スロー効果や終点効果と同様の説明を行うこともできるが、連続して起こっていることのように

受け取ることも可能である。

(13) Les invités sont en train d'arriver.

招待客が(次々と)到着している最中だ。

(14) Les invités arrivent en cinq minutes.

招待客が(次々と)5分で到着する。

(ibid. 58)

以上四分類されたアスペクトのうち、内在的に終点がある完了のアスペクトを持つものは達成・瞬間動詞、終点が無い非完了のアスペクトを持つものは状態・活動動詞である³。

3. リサーチクエスチョン

本論文におけるリサーチクエスチョンは以下の通りである。

- (a) 完了アスペクトを有する複合過去形には語彙アスペクトも完了(達成動詞・瞬間動詞)、非完了アスペクトを有する半過去形には語彙アスペクトも非完了(状態動詞・活動動詞)といったように、教科書で用いられている動詞は文法アスペクトと語彙アスペクトが一致しているのか。またその割合は日本で出版された教科書とフランスで出版された教科書で一致しているのか。
- (b) 動詞の種類は、日本で出版された教科書とフランスで出版された教科書で一致しているのか。
- (c) 動詞が提示されている状況・文脈は、日本で出版された教科書とフランスで出版された教科書で一致しているのか。

4. データ

本論文で使用する教科書は、日本で出版された教科書が18冊、フランスで出版された教科書が6冊であ

表2 日本で出版された教科書一覧

	教科書名	出版年	出版社
1	ピエールとユゴー	2019年	白水社
2	フランス語でサバイバル!	2019年	白水社
3	フランス語の彼方に	2018年	朝日出版社
4	フランセ・アンタンシフ	2018年	朝日出版社
5	新・コンタクトABC	2018年	朝日出版社
6	アクティヴ!	2018年	白水社
7	パラレル1	2018年	白水社
8	パザパ話せて書けるフランス語入門	2018年	三修社
9	プティ・シュマン(改訂版)	2017年	白水社
10	ボン・ジュルネ!	2017年	白水社
11	なびふらんせ1 —パリをめぐる—	2016年	朝日出版社
12	街かどのフランス語—三訂版—	2016年	朝日出版社
13	新装 カフェ・フランセ	2016年	朝日出版社
14	ぜんぶ話して!	2015年	白水社
15	Moi, je... コミュニケーション	2012年	アルマ出版
16	Conversation et Grammaire	2007年	アルマ出版
17	Spirale	2006年	ピアソン・エデュケーション
18	パスカル・オ・ジャポン	2006年	白水社

³ それぞれの語彙アスペクトを持つ動詞句について、以下このように達成動詞、瞬間動詞、状態動詞、活動動詞と表記する。

る(表2, 3)。研究対象となる複合過去形と半過去形の合計数に、両教科書間で大差をつけないことを念頭に置いた結果、母数が大きく異なることとなった。フランスで出版された教科書の一冊のページ数が多いのに対して、日本で出版された教科書の一冊のページ数は少ないため冊数の違いが生じている。またこれらの教科書は全て、フランス語の基礎を学習するために使われるA1レベルのものである。文法を学習することのみを目的とした教科書ではなく、総合的なフランス語力を養うための教科書を選択した。

表3 フランスで出版された教科書一覧

	教科書名	出版年	出版社
1	Cosmopolite 1	2017年	Hachette
2	Totem 1	2014年	Hachette
3	Zénith	2012年	CLE Internationale
4	écho A1	2010年	CLE Internationale
5	Le nouveau taxi 1	2009年	Hachette
6	Alter Ego	2006年	Hachette

本論文で使用するデータは、複合過去形か半過去形で提示されている文章のみに限定され、練習問題は含まれない。

5. 手法

分析を始めるにあたり、複合過去形と半過去形を全て抽出した後、「aller + 動詞の不定形」と「venir de + 動詞の不定形」、「si + 半過去形」で現れているものは除外した。「aller + 動詞の不定形」には近接未来形の用法があり、またそれぞれ近接過去形、さらには勧誘の表現や非現実の仮定を表すものであるためである⁴。

(15) J'allais faire mes courses le dimanche.

日曜日に買い物に行っていた。 / 日曜日に買い物をするところだった。

(『フランセ・アンタンシフ』, p.67)

(16) Et, en plus, il venait de pleuvoir, la route était glissante...

そしてそれに、雨が降ったばかりで道路が滑りやすくなっていた。

(*Le nouveau taxi 1*, p.90)

(17) Si on allait au restaurant chinois ?

中華料理店に行かない？

(『パザパ』, p.128)

(18) Si j'étais libre, je t'aiderais.

もし私が自由であったら、君を助けただろう。

(『フランセ・アンタンシフ』, p.96)

本論文では過去としての複合過去形と半過去形のみを調査対象とする。

⁴ 以下、教科書から引用した例文の日本語訳と下線は全て筆者によるものである。

6. 分析

6.1. 統計的分析

本論文において調査対象となる複合過去形と半過去形は以下のように分布している⁵。

表4 時制割合

	フランス	日本
複合過去形	1539 (75.48%)	1537 (77.94%)
半過去形	500 (24.52%)	435 (22.06%)
計	2039 (100.00%)	1972 (100.00%)

複合過去形と半過去形の割合を算出すると、フランスで出版された教科書（以下フランスの教科書）と日本で出版された教科書（以下日本の教科書）間で大きな相違は見られない。なお、複合過去形と半過去形の合計数に両教科書間で大差がつかないように注意してデータを収集したが、収集段階ではそれぞれの生起頻度にまで配慮したわけではない。

次にこれら二つの時制で現れている全ての動詞句について、表1で前掲した共起テストを用いて語彙アスペクト別に分類した。複合過去形における語彙アスペクト種類別生起頻度は以下の通りである。

表5 複合過去形における語彙アスペクト種類別生起頻度（4分類）

	状態	活動	達成	瞬間	計
フランス	174 (11.31%)	379 (24.63%)	498 (32.36%)	488 (31.71%)	1539 (100.00%)
日本	83 (5.40%)	463 (30.12%)	652 (42.42%)	339 (22.06%)	1537 (100.00%)

文法アスペクトが完了である複合過去形の生起頻度についてカイ二乗検定を行うと、両教科書間で有意差が見られた ($\chi^2 = 88.07$, $df = 3$, $p < .05$)。その後、以下の表の通り、語彙アスペクトが非完了である状態動詞と活動動詞、完了である達成動詞と瞬間動詞をそれぞれまとめた合計数を算出した。フランスの教科書では64.07%、日本の教科書では64.48%を占める達成動詞・瞬間動詞で多く現れていることが分かる。つまり、完了のアスペクトを持つ動詞句の割合が高い。

表6 複合過去形における語彙アスペクト種類別生起頻度（2分類）

	非完了（状態+活動）	完了（達成+瞬間）	計
フランス	553 (35.93%)	986 (64.07%)	1539 (100.00%)
日本	546 (35.52%)	991 (64.48%)	1537 (100.00%)

表6をもとにカイ二乗検定を行うと、両教科書間で生起頻度に有意差は見られなかった ($\chi^2 = 0.06$, $df = 1$, $p > .05$)。フランスの教科書では達成動詞と瞬間動詞の割合がそれぞれ同程度である一方、日本の教科書では達成動詞の割合が高いことがその理由の一つに挙げられる。

同様に、非完了アスペクトを持つ半過去形についても検討する。半過去形における語彙アスペクト種類別生起頻度は以下の通りである。

⁵ 以下表中ではフランスで出版された教科書を「フランス」と指し、日本で出版された教科書を「日本」と指す。

表7 半過去形における語彙アスペクト種類別生起頻度（4分類）

	状態	活動	達成	瞬間	計
フランス	318 (63.60%)	108 (21.60%)	53 (10.60%)	21 (4.20%)	500 (100.00%)
日本	321 (73.79%)	87 (20.00%)	21 (4.83%)	6 (1.38%)	435 (100.00%)

カイ二乗検定の結果、両教科書間で生起頻度に有意差が見られた ($\chi^2 = 20.02$, $df = 3$, $p < .05$)。次に、状態動詞と活動動詞、達成動詞と瞬間動詞をそれぞれまとめた (表8)。

表8 半過去形における語彙アスペクト種類別生起頻度（2分類）

	非完了（状態+活動）	完了（達成+瞬間）	計
フランス	426 (85.20%)	74 (14.80%)	500 (100.00%)
日本	408 (93.79%)	27 (6.21%)	435 (100.00%)

フランスの教科書では85.20%、日本の教科書では93.79%と、非常に高い割合を占めている状態動詞・活動動詞で、半過去形が多く使われていることが明らかである。つまり、語彙アスペクトが非完了の場合の割合が高い。その傾向は日本の教科書において顕著であり、表8をもとにカイ二乗検定を行うと、両教科書間で生起頻度に有意差が見られた ($\chi^2 = 17.83$, $df = 1$, $p < .05$)。語彙アスペクトを大きく二分したとしても、両教科書間で生起頻度に差があることが分かる。日本の教科書では、特に状態動詞の割合が高いことがその理由の一つに挙げられる。

6.2. 動詞の種類に関する分析

どちらの教科書においても文法アスペクトと語彙アスペクトが一致する組み合わせで多く出現することが明らかになった。一致する組み合わせに対して詳細な考察を加えていくため、本論文において以降取り上げる時制と動詞の組み合わせは、複合過去形かつ達成動詞・瞬間動詞、半過去形かつ状態動詞・活動動詞に限る。本節では、とりわけ各上位頻出動詞6つを提示して、使用されている動詞が両教科書間で一致しているのかを探る⁶。まずは、「複合過去形かつ達成動詞」の上位頻出動詞について検討する。

表9 「複合過去形かつ達成動詞」の上位頻出動詞⁷

フランス			日本		
動詞	出現数	割合	動詞	出現数	割合
aller	90	18.1%	aller	201	30.8%
voir	53	10.6%	voir	94	14.4%
rencontrer	37	7.4%	dire	89	13.7%
faire	31	6.2%	rentrer	30	4.6%
choisir	21	4.2%	visiter	30	4.6%
visiter	19	3.8%	rencontrer	22	3.4%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
計	497	100.0%	計	652	100.0%

上位6つのみからも重複が見られ、特に aller と voir は両教科書において頻出している。中でも日本の教

⁶ それぞれ上位約50%以上の頻出動詞が提示できるため、提示する動詞数を6つに絞っている。

⁷ 本節の各表について、フランスの教科書と日本の教科書のどちらにも共通して現れる動詞を網掛けにしている。

科書における aller が占める割合は非常に高いことが分かる。「複合過去形かつ瞬間動詞」においても上位頻出動詞6つを取り出す。

表10 「複合過去形かつ瞬間動詞」の上位頻出動詞

フランス			日本		
動詞	出現数	割合	動詞	出現数	割合
naître	61	12.5%	sortir	45	13.3%
arriver	47	9.6%	arriver	31	9.1%
partir	45	9.2%	se lever	30	8.8%
acheter	40	8.2%	acheter	27	8.0%
sortir	22	4.5%	partir	24	7.1%
trouver	20	4.1%	finir	21	6.2%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
計	488	100.0%	計	339	100.0%

同様に、上位頻出動詞から同一の語は多数見られる。「半過去形かつ状態動詞」についても上位頻出動詞を提示する。

表11 「半過去形かつ状態動詞」の上位頻出動詞

フランス			日本		
動詞	出現数	割合	動詞	出現数	割合
être	115	36.2%	c'est	115	35.8%
c'est	54	17.0%	être	108	33.6%
avoir	42	13.2%	avoir	33	10.3%
y avoir	13	4.1%	y avoir	13	4.0%
habiter	11	3.5%	faire	11	3.4%
faire	10	3.1%	aimer	9	2.8%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
計	318	100.0%	計	321	100.0%

本論文で取り上げるデータに c'est と y avoir の例が多く含まれていたため、それぞれ être と avoir で一括りにせずに分けてカウントをした。どちらの教科書においても être と c'est が「半過去形かつ状態動詞」の多くを占めていることが分かる。そしてそれは特に c'est の頻度が高い日本の教科書において顕著である。「半過去形かつ活動動詞」については、上位頻出動詞を5つ提示する⁸。

表12 「半過去形かつ活動動詞」の上位頻出動詞

フランス			日本		
動詞	出現数	割合	動詞	出現数	割合
jouer	11	10.2%	faire	43	49.4%
faire	10	9.3%	dormir	7	8.0%
parler	10	9.3%	pleuvoir	5	5.7%
lire	8	7.4%	se promener	5	5.7%
déjeuner	7	6.5%	regarder	4	4.6%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
計	108	100.0%	計	87	100.0%

⁸ この組み合わせにおいてのみ、提示する上位頻出動詞を例外的に5つに絞っている理由は、上位6番目に同頻度の動詞が各教科書において複数存在するためである。

「半過去形かつ活動動詞」では、両教科書間で一致している上位頻出動詞は比較的少ない。特筆すべき点は、日本の教科書において **faire** が極めて多く用いられている点である。フランスの教科書においてこの動詞はそれほど多用されているわけではない。

6.3. 提示方法に関する分析

さらに考察を深めるため、どのような文脈で教科書に提示されているかを分析する。本論文では前節で挙げた各頻出動詞の中から、両教科書間に共通して出現している動詞を出発点として概観する。教科書内では、時制の用法や文法事項を説明するために一文のみが提示されていることも往々にしてある。しかし、対象とする動詞が出現している環境を一定の文章のまとまりの中で分析するため、二文以上の連なった文章内で出現している例から主に考察する。

初めに、複合過去形について検討する。「複合過去形かつ達成動詞」については **aller** と **voir** を、「複合過去形かつ瞬間動詞」については **arriver** を分析する。日本の教科書に特徴的である提示方法としては、以下のような特定の動詞のみを用いた、反復練習のための会話例文が挙げられる⁹。

(19) **Vous êtes déjà allé** en France ?

Non, **je n'y suis jamais allé**.

フランスに行ったことはありますか？

いいえ、一度も行ったことはありません。

(『アクティヴ!』, p.56)

(20) **Tu as vu** Marie ?

Oui, **je l'ai vue** hier.

マリーを見ましたか？

はい、昨日見ました。

(『フランセ・アンタンシフ』, p.62)

(21) **Vous êtes arrivées** quand au fait ?

On est arrivées hier soir, assez tard.

ところであなた方はいつ到着しましたか？

昨夜遅くに着きました。

(『ボン・ジュルネ!』, p.38)

ただし、上記の例はそれぞれ文法事項を説明する際に提示される例である。例(19)は、場所を表す **en France** を中性代名詞 **y** で置き換える例であり、例(20)は、直接目的語 **Marie** を人称代名詞 **la** (エリジョンが行われて **l'**) で置き換える例である。そして上記の三例では、それぞれ主語や直接目的語と過去分詞の性数一致の問題も含まれている。そのため、純粹に過去としての複合過去形を説明するためというよりも、むしろ細かな文法事項を説明する要素が強い例であると言える。

フランスの教科書にも同様の例が無いか確認したところ、以下の例が類似している。しかし、現在形ではあるが、**aller** 以外の他の動詞も交えた上で反復練習を促している¹⁰。

(22) Est-ce que **vous êtes déjà allé(e)s** à Bordeaux ?

Moi oui, **je suis déjà allé(e)** à Bordeaux, c'est magnifique !

Moi non, **je suis allé(e)** à La Rochelle, mais je ne connais pas Bordeaux.

Je ne suis jamais allé(e) à Bordeaux.

⁹ 以下、例文中の主語を含めた複合過去形の動詞の活用を下線で示す。また、複合過去形で **aller**, **voir**, **arriver** が現れている箇所は太字で示す。

ボルドーに行ったことはありますか？

私は行ったことがあります。最高です！

私はラ・ロシェルに行ったがありますが、ボルドーのことは分かりません。

私はボルドーに一度も行ったことはありません。 (Zénith, p.119)

反復練習以外の例には、両教科書ともに過去の出来事の列挙がある。つまり時制が複合過去形にしかなり得ない例である。

- (23) Je me suis inscrite à une école de langue pour travailler mon français. J'ai eu mon premier cours. Je suis rentrée à 10 heures, fatiguée. Je suis allée sur Internet et j'ai chatté jusqu'à minuit.

フランス語を学習するために語学学校に登録した。初回の授業を受けた。10時に疲れて帰宅した。インターネットを利用して、0時までチャットをした。 (écho A1, p.36)

- (24) Pascal est venu au Japon il y a dix jours. Il a rencontré Kumiko à Asakusa. Ils ont vu beaucoup de choses ensemble. Ils sont allés chez les parents de Kumiko. Pascal a trouvé très bons les vins de son père.

パスカルは10日前に日本に来た。浅草でクミコに会った。彼らは一緒にたくさんのものを見た。彼らはクミコの両親の家に行った。パスカルは彼女の父のワインがとても美味しいと感じた。

(『パスカル・オ・ジャポン』, p.55)

特に達成動詞の aller と voir の例を引用したが、例 (23) では J'ai eu mon premier cours. の状態動詞 avoir 以外、下線を引いた複合過去形の動詞は全て達成動詞に分類される。例 (24) では Pascal a trouvé très bons les vins de son père. の活動動詞 trouver 以外、下線を引いた複合過去形の動詞は同じく全て達成動詞に分類される。このようにある特定の文のまとまりを見ても、語彙アスペクトが完了である場合、そしてそれが達成動詞である場合、特に複合過去形で多く現れていることが確認できる。

その他両教科書間の異なる点として、フランスの教科書では日本の教科書よりも多くの半過去形を織り交ぜながら、その中の出来事として複合過去形が使われる以下のような例が見られる。このような例では複合過去形と半過去形の用法を比較することができる¹¹。

- (25) Le week-end dernier, j'étais à Londres dans un parc avec Thomas et j'ai vu l'acteur de Harry Potter. C'était incroyable. Je lui ai parlé, il était très timide. Ensuite, je suis allé dîner sur un bateau en face de la maison des Lords...

先週末、トマとロンドンの公園にいて、ハリーポッターの俳優を見た。信じられなかった。話しかけたが、彼はとても内気だった。次に貴族院の前の船でディナーをしに行った。

(Zénith, p.141)

- (26) En 2010, je vivais à Belgrade et j'étais débutante en français. Fin 2010, je suis arrivée à Strasbourg et j'ai étudié à Stralang. J'ai fait de rapides progrès. Il y avait une très bonne équipe de professeurs. J'ai rencontré des gens du monde entier, c'était comme une grande famille. Je suis rentrée en Serbie il y a deux ans.

2010年はベオグラードで生活していて、フランス語初級者だった。2010年の終わりにストラス

¹⁰ 例文中の破線は、主語を含めた現在形の動詞の活用を示す。

¹¹ 以下、例文中の主語を含めた半過去形の動詞の活用を波線で示す。

ブルに到着し、ストララングで勉強した。急速な進歩をした。とても良い先生たちがいた。世界中の人々に出会い、大家族のようだった。10年前にセルビアに帰った。

(*Cosmopolite 1*, p.146)

以上、日本の教科書とフランスの教科書における複合過去形の提示方法を比較検討した。次に半過去形の提示方法について検討する。「半過去形かつ状態動詞」の例は être と c'est を中心に、「半過去形かつ活動動詞」の例は faire を中心に確認する。前述した複合過去形かつ達成動詞・瞬間動詞において、日本の教科書では特定の動詞のみを用いた反復練習が多く見られたが、半過去形に関しても日本の教科書では状態動詞 c'était が多用されている¹²。

(27) C'était comment, vos vacances ?

C'était bien !

バカンスはどうだった？

良かったよ！

(*Spirale*, p.103)

その他はどちらの教科書においても目立った相違点はなく、両教科書において半過去形のみで構成された文章も確認できるが(例28, 29)、基本的には複合過去形を織り交ぜながら提示されている(例30, 31)。両教科書ともに、半過去形の用法を効果的に表すための同一の工夫があることが考えられる。複合過去形を使って過去の出来事を表すと同時に、その背景にある状態や状況を半過去形で示すことで、半過去形の使い方を対比的に区別することが可能となる。

(28) Où tu étais à vingt ans ? Qu'est-ce que tu faisais ?

À vingt ans, j'étais étudiant. Mais je n'étudiais pas beaucoup. J'avais beaucoup de copains. Ils aimaient faire la fête. On se couchait à cinq heures du matin. Nous n'allions pas souvent en cours.

20歳の時はどこにいた？何をしていたの？

20歳の時は学生だったよ。でもあまり勉強はしていなかったな。友達がたくさんいた。みんなパーティーを開くのが好きだったんだ。朝の5時に寝ていたよ。僕たちは授業にはあまり行ってなかったな。

(*écho A1*, p.88)

(29) Quand vous étiez petit(e), qu'est-ce que vous aimiez faire ?

J'aimais jouer à des jeux vidéo.

Vous étiez comment ?

J'étais timide et calme.

あなたが小さかった頃、何をするのが好きでしたか？

ビデオゲームで遊ぶことが好きでした。

あなたはどんな子でしたか？

内気で物静かでした。

(『アクティヴ!』, p.45)

(30) J'ai vécu à New York pendant 3 ans. J'étais hôtesse d'accueil. Ce travail ne me plaisait pas. J'ai décidé de changer de carrière. Je suis partie au Japon.

私はニューヨークで3年間生活しました。受付をしていました。この仕事は好きではありませんでした。転職を決断しました。日本へ発ちました。

(*Totem 1*, p.106)

¹² 以下、半過去形で être, c'est, faire が現れている箇所を太字で示す。

(31) Et... qu'est-ce que tu faisais quand le voleur est entré ?

On était dehors. Il n'y avait personne à la maison.

Moi, je voulais sortir hier mais comme il pleuvait fort, je suis restée à la maison toute la journée. Mais, je n'ai rien entendu.

Moi, je suis sorti pour acheter du pain mais je n'ai rencontré personne.

それで、泥棒が入った時、君は何をしていたの？

外にいたよ。家には誰もいなかった。

私は昨日出かけたかったんだけど、大雨だったから一日中家にいたよ。でも何も聞こえなかった。

僕はパンを買いに出かけたけど、誰にも会わなかったな。 (『プティ・シュマン』, p.58)

最後に、活動動詞 faire に見られた特徴を二点記述する。一点目は、どちらの教科書においても何をしてきたのかを尋ねる疑問文 (例28, 31参照) で多く使われている点である。一点目と関連して二点目の特徴は、どちらの教科書においても、faire は日本語訳をすると「～する」と訳せる場合で出現している例がほとんどであるという点である。faire は、クッキーを「つくる」(faire des cookies)、ピアノを「弾く」(faire du piano) など、多義性を持つ動詞である。しかしながら、このように A1 レベルの教科書で意味が限定されている理由は、動詞の多義性よりも、半過去形の活用や用法を学習することが優先されているためであると考えられる。そのため、faire という動詞を学ぶ第一段階で出てくる「～する」という意味での文が多く現れていることが考えられる。

6.4. 結果と考察

以上の結果からリサーチクエスチョンに沿って結論を提示する。「(a) 完了アスペクトを有する複合過去形には語彙アスペクトも完了 (達成動詞・瞬間動詞)、非完了アスペクトを有する半過去形には語彙アスペクトも非完了 (状態動詞・活動動詞) といったように、教科書で用いられている動詞は文法アスペクトと語彙アスペクトが一致しているのか。またその割合は日本の教科書とフランスの教科書で一致しているのか。」に関しては、どちらの教科書においても文法アスペクトと語彙アスペクトが一致して使われる傾向にあることが分かった。つまり、文法アスペクトが完了である複合過去形については、語彙アスペクトも完了である動詞が多く使われていた。特に達成動詞の割合が高く、日本の教科書ではそれが顕著であった。しかし、語彙アスペクトが完了である動詞 (達成動詞・瞬間動詞)、非完了である動詞 (状態動詞・活動動詞) に分類してカイ二乗検定を行うと、両教科書間で生起頻度に有意差は見られなかった。したがって、語彙アスペクトを二分類した場合、その割合は両教科書間で一致していると言える。文法アスペクトが非完了である半過去形については、語彙アスペクトも非完了である動詞が多く使われていた。特に状態動詞が多くを占めていて、その傾向は日本の教科書の方が高かった。語彙アスペクトを完了と非完了の二種類に大別してカイ二乗検定を行った結果、生起頻度に両教科書間で有意差が見られた。つまり、その割合は半過去形では一致していないことが分かった。

「(b) 動詞の種類は、日本の教科書とフランスの教科書で一致しているのか。」というリサーチクエスチョンについては、複合過去形かつ達成動詞・瞬間動詞、半過去形かつ状態動詞・活動動詞において、それぞれ上位頻出動詞を見ながら検討した。その結果、上位頻出動詞のみを見ても、現れている動詞は基本的に一致していることが明らかになった。しかしながら完全に一致しているわけではなく、「複合過去形かつ達成動詞」では aller、「半過去形かつ状態動詞」では c'est、さらに「半過去形かつ活動動詞」では faire のそれぞれが占める割合が、日本の教科書でより高いことが分かった。

「(c) 動詞が提示されている状況・文脈は、日本の教科書とフランスの教科書で一致しているのか。」に関して、複合過去形かつ達成動詞・瞬間動詞、半過去形かつ状態動詞・活動動詞に限って調査を行った。

「複合過去形かつ達成動詞」では *aller* と *voir*、「複合過去形かつ瞬間動詞」では *arriver* を検討した。複合過去形に関しては、日本の教科書において、ある特定の動詞のみを用いた反復練習を促すための会話例文が確認できた。一方、フランスの教科書ではそのような例は確認できなかった。両教科書に共通する点は、検討した動詞が過去の出来事を列挙する場合、つまり動詞が複合過去形にしかなり得ない文脈で多く現れている点である。半過去形で表される過去の状況と、複合過去形で表される過去の出来事の対比を提示する文章も見られたが、それはフランスの教科書において顕著に見られた。

以上のことから、複合過去形について、両教科書における語彙アスペクトの割合や動詞そのものを見ると、表面的に一致している点が多いが、提示のされ方にまで目を配ると内情は異なることが確認できる。A1レベルの日本の教科書においては、複合過去形や半過去形の使い分けよりも、複合過去形そのものの作り方や、性数一致など基本的な事項をマスターさせることを重要視していると言える。すなわち、日本人にとって、複合過去形に活用させるという初歩の段階さえ難しいということが考慮された上で、教科書が構成されていると考えられる。

リサーチクエスション (c) の半過去形に関する調査において、「半過去形かつ状態動詞」では *être* と *c'est*、「半過去形かつ活動動詞」では *faire* を検討した。両教科書間の相違点は、*c'était* のみを用いた会話文が、日本の教科書に限り用いられているという一点のみであった。共通点としては、複合過去形と共に提示されている点、また「半過去形かつ活動動詞」で検討した *faire* については、「～する」という意味で、特に疑問文として現れている点が挙げられる。

以上のことから、半過去形についてまとめると、両教科書における語彙アスペクトの割合は異なることが分かった。それは日本の教科書において *c'était* が多用されていることが要因であると考えられる。そして、特に活動動詞ではその上位頻出動詞も多少両教科書間で異なることが分かったが、全体的な提示方法に明らかな相違はない。例文を使った説明レベルでは、日本人が半過去形を学習する難しさは、他の言語を母語とする学習者と特別変わりはないと考えて、教科書が構成されている可能性がある。つまり複合過去形と比較すると、複合過去形の方が日本人にとっては難しいということが示唆される。それには様々な理由が考えられるが、その一つに活用の問題がある。複合過去形に活用する際は、助動詞を *être* か *avoir* のどちらか一方を選択することに始まり、過去分詞形を知る必要があったり、性数一致の規則を学習したりしなければならない。半過去形への活用は複合過去形と比べて単純な場合が多く、その動詞の現在形 *nous* の活用形と、半過去形活用語尾を知ってさえいれば良い。このように、複合過去形には前提として煩雑な活用の問題があるため、日本の教科書では、例文を用いながらこの点を半過去形よりも丁寧に説明していることが考えられる。

7. おわりに

本論文を通して、教科書で見られる複合過去形と半過去形の特徴の一端を明らかにすることができた。特に複合過去形に関して、フランスの教科書と比較すると基本的な構造を学習させる目的が、日本の教科書ではより強く表れていることが分かった。このような教科書の特徴を理解すると、学習者の特性や授業の目的を考えて教科書を選択することが可能となる。例えば文法事項を詳しく教えた場合は、文法事項に関わる例文が多い傾向にある日本の教科書を選択すると良い。一方、文法に関しては他の授業で説明ができるなど、文法事項を教えることが先決でない場合は、フランスの教科書を選択することで学習内容のバランスが取れる。さらに今回検討した二種類の時制に関して、教科書の内容に加えて補足説明をする際に、頻出動詞を避けて提示するなど工夫を凝らすこともできる。したがって、教科書を分析することは授業作りに直結する重要課題である。

外国語学習において、語彙学習とその語彙に出会う頻度の相関関係が示されているため (Zahar, Cobb,

and Spada, 2001: 556)、頻出動詞は学習されやすいことが考えられる。しかしながら、フランス語は主語によって動詞の活用形が変わる言語であり、動詞の活用形の生起頻度は異なる。本論文では主語による各活用形にまで注視していないため、この点を確認するには更なる仔細な研究が必要である。その他、データとした両教科書の冊数に大きな違いがあるため、教科書数の少ないフランスの教科書に対する一冊の比重が極めて重い。この問題を解決するには、今後フランスの教科書のデータを増やし、そこからランダムに対象を抽出するなど工夫が必要となる。加えて、本論文では計四種類の場合のみに対して考察を行ったが、本論文で対象としていない場合、つまり文法アスペクトと語彙アスペクトが一致していない場合に対しても検討を進める必要がある。

参考文献

- Bergström, A. (1995) *The expression of past temporal reference by English-speaking learners of French*, Ph. D. thesis, The Pennsylvania State University.
- Comrie, B. (1976) *Aspect, an introduction to the study of verbal aspect and related problems*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Dowty, D, R. (1979) *Word meaning and Montague grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*, Dordrecht: Reidel.
- Guilbert, L. & Lagane, R. & Niobey, G. (1971). *Grand Larousse de la langue française: en six volumes, tome premier*, Paris: Librairie Larousse.
- Labeau, E. (2002) *The acquisition of French past tenses by tutored anglophone advanced learners: Is aspect enough?*, Ph. D. thesis, Aston University.
- Matsuzawa, M. & Kawaguchi, Y. (2020) "Passé composé and imparfait in Japanese learners of French", *Flambeau no.46*, pp.61-76.
- Ozawa, M. (2019) "Analyse de l'utilisation des verbes à partir des aspects lexicaux", *Actes du colloque international conjoint Taipei 2018 « Les nouvelles stratégies de l'enseignement du français: enjeux et innovations »*, pp. 67-83.
- Vendler, Z. (1967) "Verbs and Times". In Vendler Z., *Linguistics in Philosophy* (pp. 97-121). New York: Cornell University Press.
- Zahar, R., Cobb, T., & Spada, N. (2001) "Acquiring vocabulary through reading: Effects of frequency and contextual richness", *Canadian Modern Language Review*, 57 (4), pp. 541-572.
- 小澤南海 (2019) 「フランス語学習者の自由会話における動詞使用」, 『西南学院大学大学院研究論集 9号』, pp. 19-34.
- 松澤水戸 (2014) 「フランス語における複合過去と半過去の使い分け—語彙アスペクトを用いた分類—」, 『ロマンス語研究』, 47, pp. 37-45.